

9/25/04

360°

フォトジャーナリスト

宇田 有三

「お帰りなさい。日本に帰ってきて、ホッ、としたでしょう。いいなあ、私も、不認定の取り消しを求めて早く自分の国に帰りたいです。」

すよ」

三カ月の中米取材から帰ると、電話口から懐かしい声が聞こえてきた。

声の主は、名古屋に住んでいる在日ビルマ(ミャンマー)人のKさん(三三)。相変わらず流ちょうな日本語。

彼が難民認定を受けたのは二年前。今はアルバイトで生計を立てながら、自国の状況を日本の人に伝える活動を続けている。

九月の半ば、大阪に住む

## 42年続く軍政

月、UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)から難民認定を受けた。それなのに、日本の裁判所はそれを認めようとしな

い。今後の展開によっては、本国へ強制送還という怖れがある。「ミャンマーは今なお軍政権下にあるもの、諸外国の指摘を受けて、人権問題の改善に前向きな姿勢

を認めようとする。軍事政権を褒めそやす人は簡単に、「マスコミは善、軍事政権は悪」という図式で捉えているが、軍事政権も国をまとめるために



慢性的な電力不足は解消されない。毎夜、ロウソクの下で勉強する子どもたち(ビルマ、2003年9月)

国の貨幣価値は十年前に比べて一〇分の一近くまで下がった。軍政は四十二年も続いている。これがこの国の現実である。

ビルマ国内に住みながら、援助活動をしている知人から連絡があった。「ここに属さない外人の私でもはらわたが煮えくり返るのですから、ここの人々の心の中は、どんなものでしょうね。感情を抑えて生きていくのでしょ」

日本国内にも、ビルマ軍政と繋がりながら援助を続ける、一部の個人やグループがある。だが、その援助は、本当に現地の人々のために役立つのかどうか。訪問者として、強い「円」を持ってこの国を訪れる。良い面しか見せようとしな